

本田宗一郎
著

私の
言葉



本田宗一郎

山
福来る



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

講談社

私の手が語る

昭和五十七年五月二十四日 第一刷発行
昭和五十七年十一月二十九日 第六刷発行

定価 一二〇〇円

著者 本田宗一郎

©Seichirō Honda 1982 Printed in Japan



発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三十三 郵便番号二三
電話 東京三—九四—二二（大代表） 振替東京八—五三〇

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本は、ご面倒ですが小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。

序にかえて

手のひらの大きさや指のかたちをくらべて、右と左がこんなにちがう手もめずらしいだろう。満足な機械もなかった頃から、自動車の修理にはじまり、いろんなものをつくってはこわし、こわしてはつくってきた私の手である。

右手は仕事をする手で、左手はそれを支える受け手である。だから、左手はいつもやられる。爪つめなんか何度ぶち割って、そのたびに抜け替わったことか。よくもまた生えはえてきてくれたものである。

指の先なども、ずいぶん削りとった。右と左の人指し指や親指の長さは、いまでも一センチはちがう。左手のほう削りとられて短くなっている。すこしばかり指をつめたかたちになっている。左手はほんとうによく支えてくれた。

私はまた、人一倍ケガに強いかもしれない。手足ぐらいなら、どんな傷^{きず}ができても医者に手当てをしてもらったことがないのだ。チュツチュツと傷口から雑菌を吸い出しておいて、終わりである。それで痛みもしないし、化膿^{かのう}もしなかった。

いつかは、バイト（旋盤、平削盤、形削盤などに用いられる単刃の工具。棒状の柄の先端に刃を付けたものが多い。オランダの技師バイテルが日本に伝えたので、この名がある）の先が手のひらから手の甲へつきぬけたことがある。ふつうなら、大騒ぎになるところだろうが、私は近くにいた者に、

「おい、オキシフル出せ」

といってそのままにしておき、バイトを万力にはさんでじわじわと引き抜きながら、オキシフルの液を傷口に注いだ。さいわい、骨と骨の間を貫通していたようなので、そのまま包帯を巻き、やりかけの仕事をすませたあと、夜には一杯やりに行ったものである。もちろん、翌日もふつうに仕事をしたが、なんともなく、じきに癒^{なお}った。

これはほんの一例である。私の手はそんな私がやってきたことのすべてを知っており、また語ってもらえる。私が話すことは、私の手が語ることなのだ。そう思うとき、

私はしみじみ、体験というもののありがたさ、強さを感じる。

また、私にはこの手より何より大切な存在がある。二人三脚の経営者として、苦楽とともにしてきたホンダの元副社長・藤沢武夫である。藤沢がいなければ、いまの私はない。骨張った自分の手を見るたびに、そういうことが思われる。

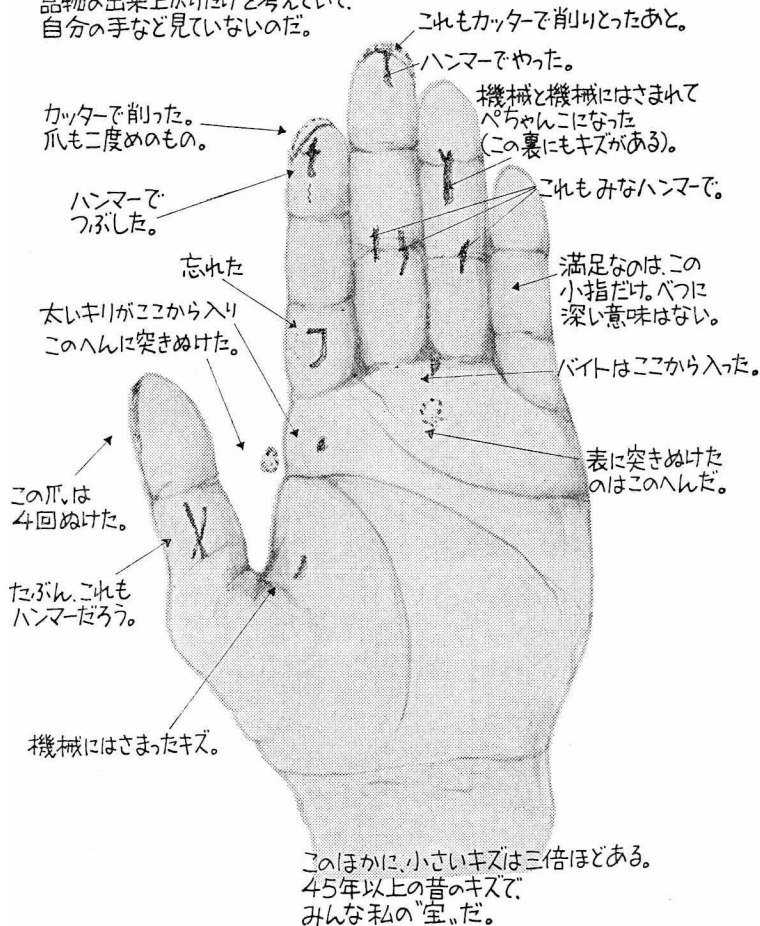
ここにおとどけするささやかな随想集は、ほとんど私の体験から生まれた話題ばかりだといってよい。表題にとった『私の手が語る』というのは、まんざら飛躍した題名でもないのではなからうか。

ひとつひとつの章はなるべく短く、おいそがしい読者各位が目を通してくださるうえで、負担にならぬよう心がけた。

そのため、いいたいことの意を尽くすことができず、舌足らずになったところも少なくないかと思う。そのところはみなさまに、いわゆる“行間を読んでいただく”友情ある読書法をお願いする次第である。

私の手

夢中になって仕事をしていると、
品物の出来上がりだけを考えていて、
自分の手など見ていないのだ。



目次

序にかえて 1

第一部

やってみもせんで 14

失敗が憎かった 17

首位優位 19

おお、すまなんだ 22

開き直り 26

企業の体質 29

得意な分野でつまずく 32

機械と人間 36

勇氣 39

相手の立場 42

心と心 46

話し好き 49

ホーリーメダル 52

波茶一杯 56

千手観音 58

姨捨て 62

やめた後の我慢 64

知りたいのは未来 68

第二部

父の量産方式 74

肌のぬくもり	76
暴れ川、天竜	78
自立心をつみとるな	81
父の遺産	84
小さな戦略家	88
六十年めの味	91
熱望（アスピレーション）	94
言葉について	101
心の修理業	104
新橋の易者	108
外来語	111
軍のゲートル	114
ある特効薬	117

第三部

自己弁護	124
暮らしの中で	127
時をかせぐ	131
トンネルの明るさ	135
おしつけ放送	138
赤と青	142
三ない運動	145
道路が国をひろげる	150
教育のあり方	153
子どもの人格	159
落ちこぼれ	163

ユーモアのすすめ 167

紙幣のデザイン 171

結婚の披露宴 174

第四部

歴史への関心 180

武器、兵器 182

矢羽根 186

ヒトとウマのちがい 189

北向きの家 192

春一番 196

酒吞童子 200

鎌倉幕府 204

北条政子 207

桶狭間の寺 211

高天神攻略 214

討ち入りのユニフォーム 217

日本海海戦 222

第五部

絵のスタート 228

おまえは、ほんとに知ってるか 231

私の目とカメラの目 234

絵の中のうそ 237

絵と照明 241

シャガール先生 244

私とゴルフ 248

はじめてのコース 252

山崎君との約束 254

ゴルフで得たもの 258

ゴルフ場の料理 260

楽しい酒 263

わがギャンブル 266

ヒトダマづくり 269

あとがき 274

装幀・絵／村上 豊
本文カット／本田宗一郎

第一部



やってみませんか

頭にひらめいたことを、ただちに手を通してかたちのあるものにし、そのアイデアを実証せずにはいられない人間。こういう人のことを、ホモ・ファールと呼ぶそうである。変な表現だが、「手の人」「モノを作る人」というわけだ。

いわゆる口先だけでいっこうに実行のともなわないタイプの人間「こうぜつ口舌の徒」とは反対の存在だということが出来るだろう。

たしかに私の生き方には、頭で考え、手で考えるといったところがある。いまはもうほとんどといっていいくらい技術的なモノ作りはやっていないが、そのかわり、たいへん技術屋的な絵をかいている。絵かきさんの絵とちがって、これまでモノを作っていたと同じような気持ちで絵筆をにぎっているのである。